様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２４３４

研究課題名（和文）災害に伴う地域の超長期的な変動の比較研究：東日本大震災被災地を事例に

研究課題名（英文）A Comparative Study of Long-Term Regional Changes Associated with Disasters: A Case Study of the Areas Affected by the Great East Japan Earthquake

研究代表者
木村　周平（Kimura, Shuhei）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：１０５１２２４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では岩手県沿岸南部で現地調査を行った。得られた知見としては、小友町のため池を中心とした集落形成のモデル、チリ地震及び東日本大震災における津波避難行動の実態に関する知見、航空写真をもとにした道路の整備と住居の位置や高度および土地利用の関係性の分析などが挙げられる。加えて、津波避難行動をめぐる民俗学と防災研究など、学際的な研究も行われ、成果の地域還元に向けて地域住民向けの冊子が作成された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義として、（1）調査対象地の住まいや暮らし、災害対応に関わる知見の蓄積、（2）比較とモデル化、および学際研究に向けた試み、が挙げられる。新型コロナウイルス感染症の流行のため、研究期間の後半で現地調査が困難になり、計画通りに研究を遂行できなかったが、進行しなかったが、知見は論文や書籍の形で公表した。また、本研究の社会的意義として、現地への成果還元方法の探求という点が挙げられる。作成した冊子は多様な世代の地域住民から高い評価を得た。

研究成果の概要（英文）：Based on the fieldwork in the southern coastal area of Iwate Prefecture, we gained important findings including (1) a reservoir-centered community formation model in Otomo-cho, Rikuzentakata, (2) patterns of tsunami evacuation behavior in the Chilean earthquake and Great East Japan Earthquake in Otomo-cho and Ryori, and (3) the relationship between road development and the changes in location of dwellings and land use based on aerial photographs. In addition, interdisciplinary studies were initiated, which included one on tsunami evacuation behavior by a collaboration between folklorists and a scholar of disaster studies. The result of this research was handed to local residents in the form of a booklet.

研究分野：文化人類学

キーワード：災害　景観変容　復興　民俗

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、文化人類学・民俗学でも自然災害への関心が高まっている。文化人類学においては特に 1980 年代以降、国内外で民族誌的な事例研究が蓄積されている。また、東日本大震災は、被災した人々の生活を理解するうえで民俗学的な研究がもつ重要性を明らかにした［川島 2012 など］。申請者はそうした蓄積を整理し、長期的に地域に密着して調査を行う文化人類学や民俗学のアプローチが災害研究と実践に役立ちうると指摘した［木村 2016］。こうした取り組みの重要性は、地域性を重視する復興計画・まちづくりの流れとも一致する［饗庭 2014 など］。

この範例となるのは、三陸の村々を丹念に歩いて観察し、津波後の住居の移転状況を明らかにし、低地復帰の要因を探った山口弥一郎の古典的研究［2011（1943)］である。これは世界的にも類まれな研究だが、同時代的な国家レベルの政策が現地に与えた影響［岡村 2014］が視野に入っていない、個別の家に注目し、集落内の共同利用空間の変化は十分捕捉していない、などの問題点もある。申請者らは、東日本大震災以降、都市計画・防災学・文化人類学・建築史等の協働で被災地でのまちづくり支援と調査を行うなかで、以上のような点に気付き、岩手県大船渡市三陸町綾里地区を対象に、今後の「防災まちづくり」を過去の地域の変容の延長線上に位置づける研究と、現地への成果還元を進めてきた（科研基盤 B「津波常襲地における 50 年後を見据えた津波リスク軽減方策とその伝承に関する研究」代表：饗庭伸)。

その結果、綾里地区における、昭和三陸津波以降の個別の世帯の動きと、集落ごとの空間的な変容のパターン、個別性／共同性のダイナミズムを生み出す諸要因（生業・人口・インフラ・地域制度・地理的条件）が明らかになった。この成果の一部は、展示や報告会、中学校でのワークショップを通じて地域に還元しているが、この知見について、陸前高田市で調査している民俗学者の中野と意見交換したことが本研究の着想につながった。本研究は綾里の空間変容に関する知見を、条件の違いに配慮して選定した他の地域と比較することで、より包括的な変容のパターンを導こうとするもので、いわば山口の労作の現代化を目指すものだといえる。

２．研究の目的

本研究は、三陸沿岸部での分野横断的な調査に基づき比較研究を行うことで、①災害に伴う地域社会の長期的な変容をモデル化すること、それによって、②地域社会の今後について、地域を構成する多様な当事者が対話するための土台を提供すること、を目的とする。具体的には、3 つの調査地において、昭和三陸津波から東日本大震災後の現在に至る 80 年余の被災と復興の反復的プロセスを、空間的な側面に着目して明らかにし、それを引き起こした諸要因（生業、インフラ、地域組織等）を探る。「災害の記憶の継承」が叫ばれるなか、実際の変容を長期的なタイムスパンで捉える研究は国内外にも例がなく、学術的にも実践的にも大きな意義を持つ。

３．研究の方法

【当初計画】

本研究では、綾里と、岩手県大槌町吉里吉里地区、岩手県陸前高田市小友町という３つの地区（および補足的に大船渡市三陸町吉浜も扱う）によって、その空間変容とその要因を比較し、長期的な空間変容のパターンを明らかにする。

（１）　住まいの移動

対象地域内での住居移転の動きのパターンを、綾里で見出した時期区分、つまり（a）昭和三陸津波から、それに伴う空間変容がかたちをなす戦後期、(b）港湾施設整備が進み、経済的に活気のある 1960 年前後から平成初期、(c）地区の衰退が明確化する 2000 年ごろから震災直前まで、(d）震災後から現在に続く復興期、にさしあたり区切ったうえで、聞き取りと過去の住宅地図・地籍図等の資料を使って明らかにする。(ただし調査の結果、時期区分を見直すこともありうる)。

（２）　共同利用空間の変遷

地域を考えるうえで重要なのは、港に近く、かつて住宅地であった低地部分を誰がどう利用するかであり、多くの地域で、現在の復興においても懸案事項となっている。これについて、(1）で示した時期区分を目安に、(a）昭和三陸津波後の復興計画における土地利用形態、(b）その後の人口増期における変化、(c）港湾施設整備に伴う変化、(d）震災後の動き、をあとづける。

（３）　地域社会の変容

聞き取りおよび文書資料をつうじて、(a）人口の推移、(b）契約会や組合、行屋等の地域組織・制度の構成と役割の変化、(c）漁業をはじめとする生業のあり方の変化、(d）交通やインフラの整備状況、(e）今回の避難行動等に現れる津波への意識、を調査することで、各地区での（1）と（2）の土地利用の背景・要因を明らかにする。

（４）　各地域の特徴の明確化・包括的モデルの提示

上の（1）～（3）の調査に基づき、(a）各地区における変容の主要な動因やパターンを明らかにし、そのうえで（b）災害に伴う長期的な空間変容とその諸要因についてモデル化する。

【実際の推移】

初年度（2017 年度）に岩手県大船渡市三陸町綾里地区で、予定通り合同での調査を行った。具体的には民俗学班は漁業や林業などの生業、女性の暮らしについての聞き取りを行うとともに、集落の契約会の資料を入手し、その整理を行うとともに、機能や変遷についての分析を行った。建築史班は、ある集落におけるインタビュー調査および家屋の実測調査、加えて林業に関する基礎データの整理を行った。防災班は東日本大震災時の避難行動および過去の津波の教訓継承について聞き取りを行った。空間班は漁港周辺の土地利用について調査を行った。

２年目（2018 年度）は、陸前高田市小友町で調査を行った。そこでは建築史チームは地区の東部を中心とした古い家屋の実測、防災チームは、地区の東端・西端の海に面した集落における、東日本大震災時の避難経路の聞き取りや、災害伝承についての調査、そして都市計画チームは、道路や鉄道の整備を中心にしつつ、地区西部の埋め立てやコンビナート建設計画も含めた、地区全体での空間的な変容についての調査、文化人類学では、地域組織のあり方について調査することとした。また民俗チームは、これまでの調査を踏まえて、本科研のテーマである地域変容について調査を行うこととした。ただし、メンバーの日程上の都合で合同調査ではなく、小グループに分かれての調査となった。その後、2019 年 2 月 11 日に研究会を行い調査成果を共有し、次年度に向けた計画を議論するなかで、３年目に大槌町吉里吉里地区で調査を行うのではなく、引き続き小友町で調査を行うことになった。

３年目（2019 年度）は、引き続き小友町で調査を行うとともに、上記の（４）モデルの提示、および調査成果の地域への還元に向けた準備を進めた。6 月の第１回研究会を行った。そこでは、長崎大学の友澤悠季准教授にお越しいただき、調査地である広田湾での火力発電所建設反対運動についての研究についてお話しいただくとともに、本科研メンバーの青井が都市史における「テリトーリオ」概念を解説し、分野横断的な本研究の今後の研究方針について議論した。夏季調査では、小友地区において都市計画チーム（饗庭）が、民俗学チーム（小谷・中野）とともに、駅前の街並みや、道路の変化を中心にした景観変容について調査した。建築史チーム（石榑・岡村・青井）は、民俗学の辻本とともに、溜池や水路を中心にした小友の景観、集落構造について調査した。防災チーム（池田）は木村と共に、東日本大震災及びチリ地震津波への対応について小友町西部で調査した。その他、民俗学チーム（川島・浅野）はそれぞれ調査を行った。調査成果の現地での共有は 3 月上旬に実施することを計画していたが、新型コロナウイルスの影響拡大を受け、現地対応者との相談の結果、延期することとなった。

最終年である４年目（2020 年）は、新型コロナウイルス感染症の流行のために現地を訪れることが困難になった。オンラインでの研究会も行ったが、主要な研究対象者の多くが高齢でありオンラインでのインタビューも困難であることもあり、現地調査に変わる効果的な代替方策を考案することができなかった。そのため、研究期間を延長することで、当初計画を実施することとした。しかし、残念ながら 2021 年度も感染流行が続き、現地からは調査の許可を得ることができなかった。そのため、2021 年夏の時点で、オンラインでの研究会を経て、この研究における現地での再度の調査を断念することと、これまでの成果を現地向けの分かりやすい冊子としてまとめることを決めた。そのうえで、構成を確定するとともに、冊子の作成作業のために、編集者およびデザイナーとの打ち合わせを行い、具体的なスケジュールを定め、各メンバーが執筆に取り組んだ。2021 年度の後半は、引き続き執筆に取り組みつつ、数度のオンライン研究会とメールでのやりとりなどを経て、方向性の共有や図表・写真の選定・デザインなどの作業を行い、冊子『オトモノコト』（図１）を作製した。

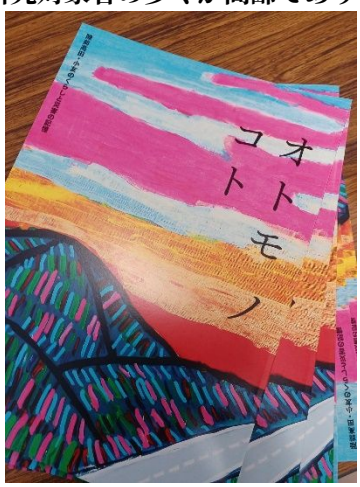

図１『オトモノコト』

４．研究成果

（１）主要な成果

○調査対象地域についての知見の蓄積

本研究では上述の通り、岩手県沿岸南部の、大船渡市三陸町綾里と陸前高田市小友町で現地調査を行った。そのなかで蓄積された知見のうち特筆すべきものとしては、（a）綾里において近世期に政治的経済的に中心的な役割を担った「砂子浜大屋」の位置づけが地域の中でどう変遷したかに関する知見（饗庭ほか 2019『津波のあいだ、生きられた村』に所収）（b）小友町における、ため池を中心とした集落形成のモデル（『オトモノコト』所収）、（c）両地域のそれぞれ複数の集落における、チリ地震及び東日本大震災におけ

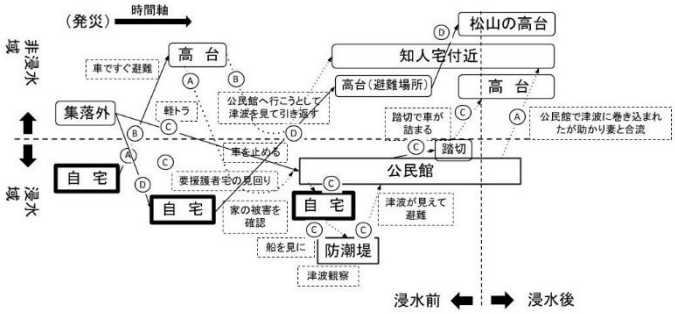

図２　ある集落の津波避難行動（池田浩敬作成）

る津波避難行動の実態に関する知見（［池田・勝海・佐藤 2021］など。図２にある集落の例を挙げる）、（d）航空写真をもとにした、両地域における道路の整備と住居の位置や高度および土地利用の関係性の分析［饗庭 2021］、（e）両地域における民俗や生活と災害対策との関わり［木村・辻本 2018］、などが挙げられる。

これらの成果は、メンバーによって、地域安全学会や日本災害復興学会、日本建築学会などの学会で発表されているほか、『造景』誌、『津波のあいだ、生きられた村』および『オトモノコト』等に収録されている。

○比較とモデル化・学際研究に向けた試み

上記のような調査地域に関わる具体的な知見の積み重ねのほか、本研究では当初目的であったモデル化についての試みも行われた。図 3 はメンバーの饗庭による、2 地区の住まいの移動に関わるモデル化の試みである。これは、地域での生活・生業の変遷やインフラ整備が住宅の移転や新築などにどのように影響を及ぼしたかをチャート図にしたものであり、両地域の変容をモデル化し、比較するための議論を進める上で重要な手掛かりとなった。本研究では上記の「テリトーリオ」の概念などを参考にこれをより精緻化する計画であったが、残念ながらコロナ禍による調査の中断により、これ以上深めることができなかった。

また、具体的な知見の蓄積と議論のなかで、これまでの学問枠組みを超えるような取り組みが現れたのも本研究の成果と言える。都市計画学と民俗学、建築史と民俗学の共同などはその例だが、津波避難行動研究は、防災研究と民俗学の学際的研究としての「フォークロリスティック・ハザードマップ」の提案［木村ほか 2021］につながった。

そして本研究と関連して、メンバーの辻本は山口弥一郎の研究を進めた［内山・辻本 2022］。

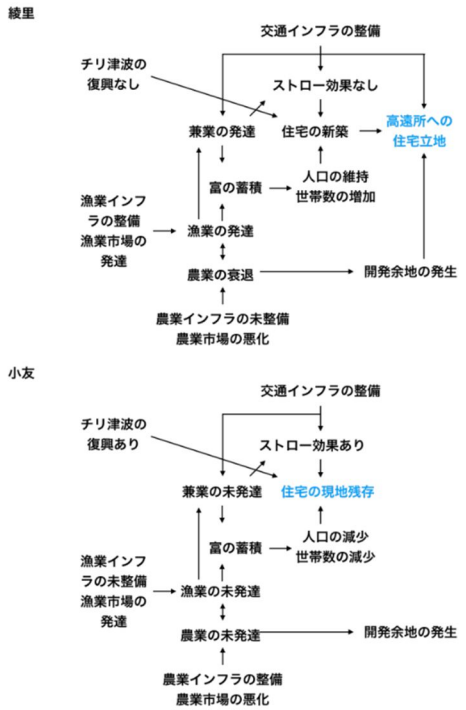

図 3 両地域の住宅移転相関図（饗庭伸作成）

○成果の還元

本研究は学問的な知見の蓄積だけでなく、その知見を地域の人々が自ら役立てることができるようにするような方途も探求した。仮に津波と津波のあいだが 50 年空いているとすれば、その間に何が起きたか、そして次に何が起きうるのか、ということは、必ずしも個々人の記憶だけでカバーできるわけではなく、何かしらのサポートがあるほうが望ましいからである。そのため、はじめの調査地であり、前科研において数年間の調査を積み重ねてきた綾里においては、その成果をもとに『津波のあいだ、生きられた村』が刊行された。そして 2, 3 年目の調査地となった小友町については、『オトモノコト』を作成した。これは、地域の中高生（おそらく近い将来に少なくない人が地域を離れることが予想される）に向けて、小友町がどのような地域であり、どう形成され、またこれまで災害にどう関わってきたのかを伝えるということを中心に、それぞれの項目を見開き 2〜4 ページ程度の短く簡明な文章と図・写真でまとめる、という方針で作成したものである（図 4）。

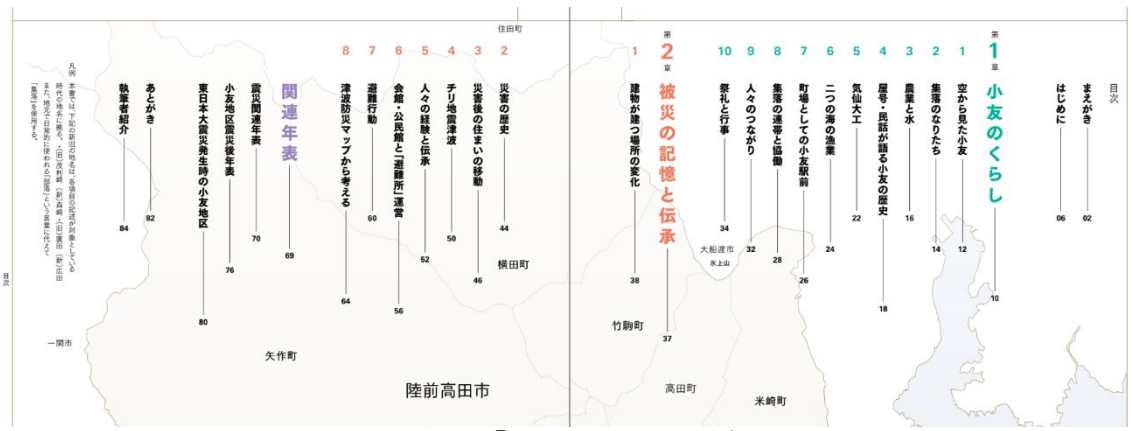

図 4 『オトモノコト』目次

この冊子については、作成プロセスや、その活用方法についての検討が十分ではなかった点は反省事項であるが、多様な世代の地域住民から好意的な評価を受けている。従来の民俗学的な調査報告書が主に調査対象となった高齢層をターゲットにしてきたことからの多少の転換がはか

られたといえる。

（２）成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究はまず、それぞれの学問分野（文化人類学、民俗学、都市計画学、建築史学、防災研究）での成果を上げており、それぞれの分野において意義ある研究となっている。例を挙げれば、本研究の成果の一部も含まれた『津波のあいだ、生きられた村』は、2021 年度に日本建築学会著作賞を受賞した。講評では「単に国や行政の政策とその後の復興を記述するのではなく、むしろ地域と住民のなかで醸成されてきた震災前後の空間と社会の記録を整理し、そこから再び「あいだ」をいかに過ごすべきかを示す実に価値のある著書として評価できる」という評価がなされている。また、本研究は学際的な災害研究としても注目を受けている。研究を通じて、それぞれのメンバーが他の分野の方法や視点、知識を取り入れられたことに加えて、上で指摘したような、民俗学と建築史学、民俗学と防災研究のような取り組みも生まれている。東日本大震災から 10 年が経過し、東日本大震災そのものの研究は減少傾向にあるといえるが、しかしより広い視野での災害への学問的関心は高まっており、その意味で本研究は重要な参照点となると考えられる。

（３）今後の展望

上記の学際研究に関しては、「住まいの移転と語り」および「民俗学と避難行動研究」に関して新たな研究助成を申請中であり、今後一層研究を展開していく予定である。また、本研究の成果はこれまで主に日本語で発信しているため、今後、英語での発信を強化していく予定である。

調査対象地域に対しては、長引くコロナ禍のため、科研の成果となる冊子を作成・送付したのみで、その活用についてまで地元の方々と十分に議論・実践できていない。これも今後の課題としたい。

【参照文献】

饗庭伸 2014「復興まちづくりでのプラクティス」木村周平・柄谷由香・杉戸信彦編『災害フィールドワーク論』、古今書院.

饗庭伸 2021「津波常習地域における長期間の空間変化――岩手県沿岸四地区を対象として」『2021 年度日本建築学会大会学術講演会梗概集（都市計画）』833-834.

饗庭伸・青井哲人・池田浩敬・石榑督和・岡村健太郎・木村周平・辻本侑生・山岸剛 2019『津波のあいだ、生きられた村』鹿島出版会。

池田浩敬・勝海貴裕・佐藤優輝 2021「東日本大震災時の三陸地域での津波避難等に関する調査――岩手県陸前高田市小友地区での調査事例」『地域安全学会 東日本大震災特別論文集』1-4.

内山大介・辻本侑生 2022『山口弥一郎のみた東北――津波研究から危機のフィールド学へ』文化書房博文社.

岡村健太郎 2017『「三陸津波」と集落再編――ポスト近代復興に向けて』鹿島出版会。

川島秀一 2012『津波のまちに生きて』冨山房インターナショナル.

木村周平 2016「人類学における災害研究――これまでとこれから」橋本裕之・林勲男（編）『災害文化の継承と創造』臨川書店.

木村周平・辻本侑生 2018「地域社会の災害復興と『復興儀礼』――津波被災地のある「失敗」事例から」『現代民俗学研究』10：1-16.

木村周平・辻本侑生・浅野久枝・池田浩敬・川島秀一・小谷竜介・中野泰 2021「『棲まう者の観点』からの津波避難行動の検討：民俗学と防災学の協働の試み」『日本災害復興学会論文集』18：11-20.

山口弥一郎 2011『津浪と村』石井正己・川島秀一編、三弥井書店.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計20件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 木村周平・伊藤泰信・内藤直樹	４．巻 20
２．論文標題 1.5次エスノグラフィが生み出すもの：文化人類学の方法についての協働的考察	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文化人類学研究	６．最初と最後の頁 104-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 饗庭伸	４．巻 54(3)
２．論文標題 津波常習地域における長期間の建物立地変化:岩手県綾里地区を対象として	５．発行年 2019年
３．雑誌名 都市計画論文集	６．最初と最後の頁 1139-1144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11361/journalcpij.54.1139	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岡村健太郎	４．巻 2020年1月号
２．論文標題 レジリエンスに先立つもの―　1933年の吉里吉里	５．発行年 2020年
３．雑誌名 建築雑誌	６．最初と最後の頁 28‐31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川島秀一	４．巻 なし
２．論文標題 山口弥一郎と昭和三陸津波	５．発行年 2020年
３．雑誌名 山口弥一郎旧蔵資料調査報告書	６．最初と最後の頁 93-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川島秀一	４．巻 42
２．論文標題 寄りものとユイコ―福島県新地町の漁業を復興させるもの	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本口承文芸	６．最初と最後の頁 224-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 辻本侑生	４．巻 41
２．論文標題 山口弥一郎の津波調査の方法論と社会的文脈	５．発行年 2020年
３．雑誌名 福島県立博物館調査報告	６．最初と最後の頁 64-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村周平、辻本侑生	４．巻 10
２．論文標題 地域社会の災害復興と「復興儀礼」：津波被災地のある「失敗」事例から	５．発行年 2018年
３．雑誌名 現代民俗学研究	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 饗庭伸	４．巻 11
２．論文標題 専門家による復興支援と情報共有	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東日本大震災合同調査報告書　建築編	６．最初と最後の頁 207-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川島秀一	4．巻 52
2．論文標題 釣師浜の震災前後の漁業	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東北民俗	6．最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川島秀一	4．巻 無し
2．論文標題 漁撈技術の復興とは何か	5．発行年 2019年
3．雑誌名 仙台ワークショッププロシーディングス	6．最初と最後の頁 77-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川島秀一	4．巻 221
2．論文標題 紫紺の海・カツオの海―カツオの起源伝承をめぐって	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 101-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川島秀一	4．巻 214
2．論文標題 和船の復元と漁労の復興	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 95-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 辻本侑生	4．巻 8
2．論文標題 『山口弥一郎伝』の執筆を目指して	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『ふぉーらむ・F』（福島県民俗学会ニュースレター）	6．最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 辻本侑生	4．巻 47
2．論文標題 山口弥一郎の岩手県旧綾里村における津波調査ノート（一九三五年）について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 福島の民俗	6．最初と最後の頁 141-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内山大介・大里正樹・山口拡・辻本侑生	4．巻 33
2．論文標題 磐梯町所蔵・山口弥一郎旧蔵ノート －解題と目録－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『福島県立博物館紀要』	6．最初と最後の頁 79-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 辻本侑生	4．巻 11
2．論文標題 災害復興を担う主体をめぐって－岡村健太郎『「三陸津波」と集落再編』を端緒に－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 現代民俗学研究	6．最初と最後の頁 87-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小谷竜介	4．巻 特別号2018
2．論文標題 東日本大震災における文化遺産の被災と対応－被災博物館の対応を中心に	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『文明』	6．最初と最後の頁 37-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ryusuke Kodani	4．巻 なし
2．論文標題 The significance of rescuing Intangible Cultual Heritage	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceeding of the Asia-Pacific Regional Workshop on Intangible Cultural Heritage and Natural Disasters	6．最初と最後の頁 67-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 饗庭伸	4．巻 3月号
2．論文標題 創造的復興のジャッジ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 10+1 (website)	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 岡村健太郎，青井哲人 ，石樽督和，小見山滉平，池田薫，西恭平， 門間翔大	4．巻 2017
2．論文標題 岩手県大船渡市三陸町綾里地区における昭和三陸津波後の復興過程に関する研究　その5　高所移転の詳細	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本建築学会 学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 713-714
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　3件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 木村周平
2．発表標題 長期的な周期で起きる災害と社会の関わり：津波被災地での調査を事例に
3．学会等名 超長期的視点から見た人口・環境・社会（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 池田浩敬・勝海貴裕・佐藤優輝・松澤憂海
2．発表標題 東日本大震災時の三陸地域での津波避難等に関する調査-岩手県大船渡市綾里地区・陸前高田市小友地区での事例-
3．学会等名 地域安全学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 川島秀一
2．発表標題 三陸の海と生き物文化―漁師から見た海洋生物
3．学会等名 生き物文化誌学会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 辻本侑生
2．発表標題 民俗学者旧蔵資料アーカイブの可能性と課題に関する論点整理―山口弥一郎旧蔵資料を中心に―
3．学会等名 日本民俗学会第71回年会
4．発表年 2019年

１．発表者名 辻本侑生
２．発表標題 津波常習地の集落景観史 ―陸前高田市小友町只出集落の事例から―
３．学会等名 東北民俗の会10月例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kentaro Okamura
２．発表標題 The Influence that the Legacy of Urban Planning Gave to Current Sanriku Coastal Villages
３．学会等名 IPHS（国際都市計画史学会）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中野泰
２．発表標題 「契約会」文書より見る「漁村」 ―岩手県大船渡市の事例から―
３．学会等名 水産史研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 辻本侑生
２．発表標題 津波常習地の漁業集落移動をめぐる歴史意識と歴史実践－気仙地方における景観復原調査の過程から－
３．学会等名 水産史研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 川島秀一
２．発表標題 ケンケン漁の始まりと伝播
３．学会等名 日本カツオ学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島秀一
２．発表標題 日本の災害文化
３．学会等名 韓国民俗学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川島秀一
２．発表標題 漁労技術の復興とは何か
３．学会等名 Asia-Pacific Regional Workshop on ICH and Natural Disasters（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川島秀一
２．発表標題 災害と共に生きた島々
３．学会等名 金曜フォーラム「北海道南西沖地震から25年、日本海・離島の災害研究」
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ryusuke Kodani
２．発表標題 Significance of Rescuing Intangible Cultural Heritage
３．学会等名 ASIA‐PACIFIC REGIONAL WORKSHOP ON INTANGIBLE CULTURAL HERITAGE AND NATURAL DISASTERS（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小谷竜介
２．発表標題 被災物と災害前の地域文化
３．学会等名 災害から生まれた物：遺体、慰霊、遺族、異物
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ryusuke Kodani
２．発表標題 Regional Culture to Covert into Cultural Property, Locul Culture not to Covert into Cultural Property
３．学会等名 Disaster Perceptions and Responses in Times of Global Upheaval（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小谷竜介
２．発表標題 文化財化する地域文化
３．学会等名 東北大学災害科学世界トップレベル研究拠点関連事業学術成果公開シンポジウム『震災復興における民俗芸能の役割と継承』（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡村健太郎，青井哲人 ，石樽督和，小見山滉平，池田薫，西恭平， 門間翔大
２．発表標題 岩手県大船渡市三陸町綾里地区における昭和三陸津波後の 復興過程に関する研究　その 5：高所移転の詳細
３．学会等名 2017年度日本建築学会（中国）
４．発表年 2017年

１．発表者名 辻本侑生・岡村健太郎・青井哲人・石樽督和
２．発表標題 災害アーカイブズとしての山口弥一郎旧蔵資料の特徴と意義
３．学会等名 第34回歴史地震研究会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計10件

１．著者名 饗庭伸・青井哲人・池田浩敬・石樽督和・岡村健太郎・木村周平・辻本侑生	４．発行年 2019年
２．出版社 鹿島出版会	５．総ページ数 120
３．書名 津波のあいだ、生きられた村	

１．著者名 Kimura,Shuhei and Kohei Inose	４．発行年 2019年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 422
３．書名 The Routledge Companion to Actor-Network Theory (edited by Anders Blok, Ignacio Farias, Celia Roberts)	

1．著者名 石樽督和・中島伸	4．発行年 2020年
2．出版社 日本建築学会	5．総ページ数 118
3．書名 ポスト東日本大震災の住まい復興と共有知構築 ー新しい計画論をめざしてー	

1．著者名 関谷　雄一、高倉　浩樹	4．発行年 2019年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 304
3．書名 震災復興の公共人類学	

1．著者名 前川 啓治、箭内 匡、深川 宏樹、浜田 明範、里見 龍樹、木村 周平、根本 達、三浦 敦	4．発行年 2018年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 384
3．書名 21世紀の文化人類学	

1．著者名 川島秀一	4．発行年 2018年
2．出版社 アーツアンドクラフツ	5．総ページ数 232
3．書名 渋沢敬三　小さき民へのまなざし	

１．著者名 住田 常生、小谷 竜介、大村 理恵子	４．発行年 2019年
２．出版社 0pa Press	５．総ページ数 117
３．書名 モダンデザインが結ぶ暮らしの夢	

１．著者名 日高 真吾，小谷 竜介	４．発行年 2018年
２．出版社 国立民族学博物館	５．総ページ数 187
３．書名 工芸継承－東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在	

１．著者名 小谷竜介	４．発行年 2018年
２．出版社 新泉社	５．総ページ数 288
３．書名 震災後の地域文化と被災者の民俗誌（高倉浩樹・山口 睦編）	

１．著者名 木村周平	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 400
３．書名 詳論　文化人類学（桑山敬己・綾部真雄編）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石樽　督和 (Ishigure Masakazu) (10756810)	関西学院大学・建築学部・准教授 (34504)	
研究分担者	青井　哲人 (Aoi Akihito) (20278857)	明治大学・理工学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	中野　泰 (Nakano Yasushi) (20323222)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	浅野　久枝 (Asano Hisae) (20700008)	京都精華大学・人文学部・講師 (34317)	
研究分担者	川島　秀一 (Kawashima Shuichi) (30639878)	東北大学・災害科学国際研究所・シニア研究員 (11301)	
研究分担者	饗庭　伸 (Aiba Shin) (50308186)	首都大学東京・都市環境科学研究科・教授 (22604)	
研究分担者	岡村　健太郎 (Okamura Kentaro) (50737088)	近畿大学・建築学部・講師 (34419)	
研究分担者	小谷　竜介 (Kodani Ryusuke) (60754562)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター・上席研究員 (84604)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	池田　浩敬 (Ikeda Hirotaka) (80340131)	常葉大学・社会環境学部・教授 (33801)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	辻本　侑生 (Tsujimoto Yuki)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関